

コロナ禍の食肉をめぐる状況

公益財団法人日本食肉流通センター

当センターでは、新型コロナウイルス感染症関連で、国産食肉の部分肉価格及び食肉業界をめぐる状況等について、2020年に8月と12月に、ホームページで公表してきました。

今回、当センターが公表している首都圏での部分肉取引情報及び総務省や食肉消費に関連する団体等が公表している統計資料等を分析するとともに、2021年4月に当センター公表委員等に対し聴き取りを行い、以下のとおりとりまとめました。

1 食肉の「セット」価格等の動向

当センターが公表している首都圏での国産の牛肉の部分肉価格（月次価格等：消費税込）が、これまでのコロナ禍でどのように推移したかを分析しました。

1-1 首都圏における牛肉の価格動向

(1) 首都圏における牛肉の部分肉セット価格（重量中央値）の動向について

ここでは、当センターが公表している牛肉品種規格、和牛チルド「4」（以降、「和牛」という。）、交雑牛チルド「3」（以降、「交雑」という。）及び乳牛チルド「2」（以降、「乳牛」という。）について、部分肉「セット」価格の動向を比較しました。

図1-1 首都圏：牛肉の品種別部分肉「セット」月次価格（重量中央値）の推移

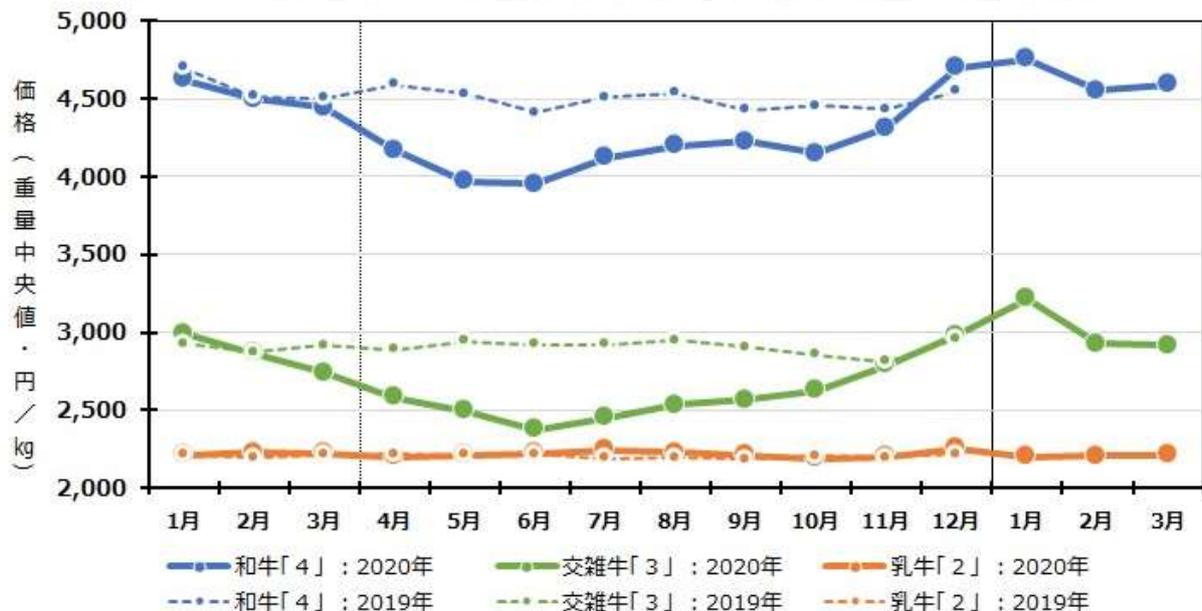
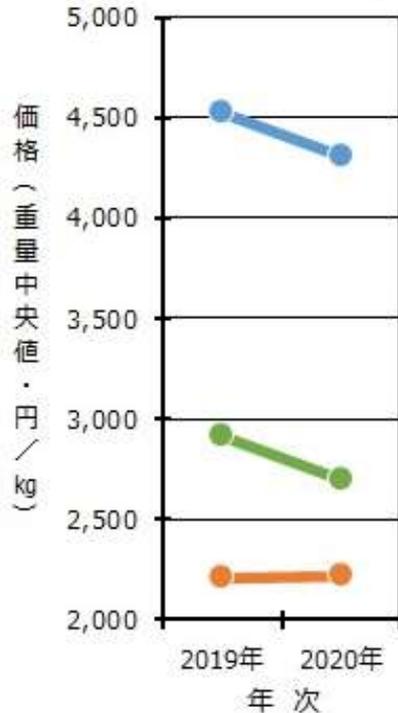


図1-1より、「和牛」及び「交雑」の月次価格は、両者とも、2020年6月に最安値を付けた後、徐々に回復しており、12月には2019年を超えるほどに価格を戻し、2021年の3月まで前年を超えて推移しています。一方、「乳牛」は、年間を通じ大きな変動もなく推移し、今年に入っても同じ状況が続いています。

なお、「和牛」及び「交雑」の部分肉セット価格が、枝肉価格より概ね1カ月遅れて連動する傾向は、コロナ禍でも継続していました。(下記(2)表1、参照)

図1-2 首都圏：牛の品種別部分肉「セット」における年次価格の推移



畜種 \ 年	2019年	2020年	前年比
和牛「4」	4,524	4,307	-4.8%
交雑牛「3」	2,916	2,691	-7.7%
乳牛「2」	2,204	2,216	+0.5%

(単位：円/kg, %)

年次ベースでみた場合、2020年は、前年比で「交雑」が約8%、「和牛」が約5%値を下げていますが、「乳牛」はほぼ変動がありませんでした。

このことから、コロナ禍の影響が多かった牛肉の品種は、「交雑」、「和牛」であり、逆に、「乳牛」は影響が少なかったと判断されます。

(2) 東京市場における牛枝肉品種別規格別枝肉価格の推移について

以下の表には、農林水産省が公表している「食肉流通統計」より、2020年1月から2021年3月までの東京市場における主要な牛品種の去勢規格についての枝肉卸売価格(税込)を抜粋し、以下の表にまとめました。

表1 東京市場における枝肉の規格別卸売価格

品 種	格付規格	和牛去勢						交雑牛去勢				乳牛去勢	
		A-5		A-4		A-3		B-3		B-2		B-2	
		価 格 (円/kg)	前年比 (%)										
2020年	1	2,681	95.6	2,274	91.0	2,018	87.8	1,605	99.3	1,474	98.5	977	95.4
	2	2,576	92.3	2,116	85.3	1,887	82.9	1,501	91.4	1,320	84.8	971	95.7
	3	2,314	83.4	1,846	75.0	1,651	73.2	1,323	82.5	1,119	75.1	958	92.4
	4	2,027	73.9	1,688	70.0	1,512	67.6	1,189	72.9	1,031	68.2	863	81.0
	5	2,201	81.2	1,817	75.4	1,610	73.1	1,256	76.4	1,130	73.0	983	92.9
	6	2,256	82.6	1,860	77.2	1,648	74.6	1,182	72.6	1,037	68.0	947	90.1
	7	2,369	87.0	2,021	84.2	1,812	82.8	1,308	80.0	1,138	75.0	917	90.3
	8	2,379	89.8	2,039	86.6	1,829	84.7	1,382	83.5	1,226	81.1	887	87.0
	9	2,416	88.7	2,079	86.3	1,888	86.9	1,315	81.6	1,140	77.2	827	84.6
	10	2,634	99.1	2,332	98.7	2,131	98.5	1,414	89.7	1,255	87.3	868	87.1
	11	2,738	99.2	2,495	103.4	2,288	106.4	1,594	99.6	1,453	101.0	955	97.4
	12	2,872	105.6	2,626	114.8	2,357	118.0	1,675	100.9	1,481	101.2	927	97.2
2021年	1	2,664	99.4	2,428	106.8	2,260	112.0	1,575	98.1	1,424	96.6	991	101.4
	2	2,679	104.0	2,430	114.8	2,207	117.0	1,484	98.9	1,339	101.4	948	97.6
	3	2,802	121.1	2,599	140.8	2,411	146.0	1,610	121.7	1,475	131.8	995	103.9
年度平均		2,503	93.9	2,201	95.4	1,996	95.7	1,415	89.0	1,261	87.2	926	92.4

資料：農林水産省「食肉流通統計」、東京食肉市場(株)

注1：消費税を含む。

注2：直近3月は速報値である。

・和牛去勢の枝肉価格は、格付のA-5・A-4・A-3規格とも、4月を底として徐々に回復し、11月には概ね前年並みになりました。2019年の12月の価格が11月より安い異常年であったこともありますが、2020年12月の価格は3規格とも前年比プラスとなり、A-3で18%高、A-4で15%高、A-5で6%高となりました。2021年3月には前年比で、A-5が21%高、A-4が41%高、A-3が46%高となっています。

・交雑牛去勢の枝肉価格は、格付のB-3・B-2規格とも、4月から6月を底として徐々に回復し、概ね11月に前年並みとなり、2021年3月には、前年比でB-3が22%高、B-2が32%高となっています。

・乳牛去勢B-2規格の枝肉価格は、和牛去勢及び交雑去勢ほど、下落率は大きくありませんでしたし、価格の戻りも緩やかです。

欧米でのコロナ禍では、と畜場や食肉加工処理場での作業員の陽性者の発生により、操業停止になり、食肉の価格が短期的に急変動した事例がありましたが、日本ではそのようなことはありませんでした。

なお、枝肉価格の価格低下率に比べ、部分肉セット価格及びロイン以外の部位別価格の低下率が小さくなるのは、枝肉を加工処理して部分肉に加工したり、部分肉を輸送したりするコストには、枝肉相場とは連動しないで近年上昇傾向にある人件費が含まれ、それらが枝肉価格に上乗せされて、セットや各部位の価格が形成されるためです。

(3) セット価格の動向と枝肉価格の動向の比較

セット価格の動向を牛肉の品種別に比較しますと、コロナ禍で負の影響を多く受けたのが「交雑」、「和牛」であり、影響が少なかったのが「乳牛」です。

ここで、2020年次の枝肉価格をみた場合、和牛去勢「A-3」では10月まで、交雑牛去勢「B-3」では11月まで、乳牛去勢「B-2」では年間を通じ、価格は前年を下回っており、全ての品種でコロナ禍に価格が下がりました。

乳牛去勢「B-2」の枝肉価格が下がっているのにもかかわらず、「乳牛」がセット価格を維持した要因は、枝肉から部分肉に加工する人件費及び必要資材費等諸経費並びに運送費が上昇し、枝肉価格に上乗せされた結果、単価の安い枝肉価格の下落分が相殺されたと考えられます。なお、上乗せ経費は、品種や肉の単価に関係なく、枝肉キロ当たりの作業単価や部分肉キロ当たりの運送費が適用されることが通常であるため、単価の高い「和牛」や「交雑」では、枝肉価格の下落分を相殺できなかったのです。

2020年6月からの回復状況についてみると、「和牛」では、年末の12月まで順調に上昇してきました。

しかし、「交雑」では、前年比でみる価格の回復は、「和牛」に比べ緩やかでした。

(考察1) なぜ、セット価格への影響が「交雑」の方が「和牛」より大きかったのか。

生産量が微増傾向であった中で、インバウンドの激減及び外食機会の減少により、「和牛」セット価格の大きな下落が2020年4月に始まりました。

政府のコロナ対策の一環として、価格が下落した牛肉に対し、「和牛保管在庫支援緊急対策事業」及び「国産農林水産物等販売促進緊急対策事業」等によって

- ① 和牛の冷凍保管経費及び新たな販売取組を支援する対策
- ② 小売業者への納入価格を仕入れ価格より安く販売できる対策
- ③ ネット販売、通販、ふるさと納税での利用を促進する対策
- ④ 新規に学校給食等に和牛肉や交雑牛肉を提供する対策

が講じられました。

量販店では、「和牛」価格が下落した4・5月期は、期間限定の特売を実施したり、9月以降は上記②の対策を活用した「和牛肉」の特売を行ったりした店舗が多くみられました。「交雑肉」より販売数量の多い「和牛肉」の特売の方が宣伝効果が高いと判断したのでしょう。②の対策を活用すると牛枝肉相場が上昇しても、補助金を活用すれば安く販売できたため、年末の牛肉需要期に向け、価格の上昇傾向が継続したのだろうとかんがえられます。

③のうち、ふるさと納税では、関係サイトをみると、「和牛肉」の数が「交雑肉」に比べ多いです。

④給食費の制約がある中で、和牛肉や交雑牛肉等を使用した牛丼等が肉牛生産地等の多くの学校給食で提供されました。

また、6月以降、「和牛肉」が大部分を占める輸出が、数量ベースで前年比で増加に転じ、その後、増加傾向が継続しました。

以上のことから、「和牛肉」の方が「交雑肉」に比べ価格の回復が早く、年次ベースでの価格下落率が小さかったのだろうと推察します。

ただ、外国人観光客数、国内の外食機会・観光が以前の水準に戻り、単価の高い牛肉への需要が回復するには、まだ時間を要するため、上記のような事業がなくなれば、牛肉の相場が今年のゴールデンウィーク後に下落することを懸念する食肉卸売業者が複数いました。